

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年4月16日現在

機関番号：35413

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21560678

研究課題名（和文） 中世後期における上層民家史の研究

研究課題名（英文） A study on the upper class dwelling house of medieval times in Japan

研究代表者

藤田 盟児（FUJITA MEIJI）

広島国際大学・工学部・教授

研究者番号：20249973

研究成果の概要（和文）：

わが国の住宅建築のうち、中世における上層民家を研究し、それが発達した場所である中世都市の発達過程を分析する方法を発見した。上層民家に住む地頭や富裕な商工業者は、経営のための接客を行うデイと呼ばれる部屋を必要としたが、それが座敷（和室）に進化したのとは別に、板敷の出居を中心的な部屋とする住宅形式が上層民家の特徴であることが判明した。また、中世都市において町家が発達したが、両者はともに「間」と呼ばれる測定寸法を使用し、「間」は7尺から6尺へ短くなった。このことから、中世に形成された都市街区は、測地尺を分析することで造成時期を推定することが可能であることが判明した。

研究成果の概要（英文）：

I study on the upper class dwelling house and the formation process of a city in medieval times in Japan. The lord of a manor who lives in the upper class house, and a rich commerce-and-industry company needed the room called "dei" which performs the reception for management. So it evolved into the drawing room called "zasiki" (Japanese-style room). Independently, it became clear that the housing form which has the central room decorative alcove with a plank floor called "dei" was the feature of the upper class house. Moreover, although the town house progressed in the medieval city, the city and the town house used the measurement size called "ken". Since "ken" became short from 7 "shaku" to 6 "shaku". So, it became clear that the city block formed at medieval times could presume development time by analyzing the size called "ken".

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,390,000	300,000	1,690,000
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
2011年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総計	3,390,000	900,000	4,290,000

研究分野：工学

科研費の分科・細目：建築学、建築史・意匠

キーワード：中世住宅、中世都市、民家、測地尺、デイ、放射性炭素分析、14C、間、座敷

1. 研究開始当初の背景

わが国の既往の住宅史研究では、支配者層の住宅形式として寝殿造りと書院造りが知られている。その一方で農民や商工業者の住宅形式として、民家や町家とよばれる住宅形式が知られている。しかし、このような上位の住宅形式と下位の住宅形式の間にどのような関係があるかについては知られていない。そこで、とくに寝殿造りから書院造りへの過渡期に当たる中世を中心に、社会的中間に位置する小規模な領主層や富裕層の住宅形式を明らかにして、住宅史の一貫性を示す必要があった。

これに関連して、現在、他の科学研究費によって集団的に行われている日本建築史の見直し研究においても、このような上層住宅史と民家史の関連付けは、重要なテーマになっているが、本研究において分析する中世の領主層・富裕層の住宅形式を本格的に検討したものはみえず、近世の民家史や、古代の中下層寝殿造りからの類推にたよる研究が多い。

もともと上層住宅史は、基礎を礎石とする構造の建築様式であり、発掘調査によって明らかになった掘立柱の上層民家や中下層民家とは成立が異なる。したがって、上層住宅から民家の成立過程は捉えられず、影響関係を推測できるに止まる。一方、民家史においても現存遺構を中心にするところから、礎石建て（石場立て）の建物が中心になり、掘立柱が圧倒的に多かった中世の民家は不明な点が多い。

そこで、発掘遺構や文献史料を中心に中世の上層民家史を検討することで、これまで住宅史の中で遅れた分野であった中世の上層民家史を研究し、上述のような研究対象の不備を補い、既往の住宅史を連続させることが必要である。

2. 研究の目的

本研究は、中世の上層民家を研究するものであり、上層民家とは社会的に中位に位置する領主層の住宅である。中世における武士や富裕層を中心にする領主層は、開発や交易の経営のために接客空間を必要としたので、農業や商工業を生業とし、縦横なコミュニケーションを必要としない通常の民家とは、住居形式が異なる可能性がある。

それを検討して、中世のわが国の社会的上位層と下位層の住宅様式の関係をも明らかにすることが、本研究の目的である。

3. 研究の方法

中世の領主層の接客空間の名称である「デイ」をキーワードにし、デイをもつ住居の形

式を探ることとする。そのためには、文献史料から「デイ」を備えた建築群を明らかにし、次にそうした建築群の特性を検討してゆくことが必要である。

つぎに、民家と異なって都市建築である町家の研究方法としては、なるべく古い町家の形式を検討することは当然として、建築単体ではなく中世都市そのものの形成過程を分析し、それを基盤に町家の形成過程や形状を分析することが必要である。そのために中世都市研究も並行して行う。

4. 研究成果

文献研究から、地頭や名主層の住宅には、必ずデイと呼ばれる接客空間があることを推測するに至った。

鎌倉の上層武家住宅では、13世紀中頃に、デイから座敷とよばれる現在の和室の原型が出現したことが、前回の科学研究費による上層武家住宅の研究より明らかになったが、この座敷が、いわゆる近世の上層住宅の建築様式である書院造りの基盤になると考えられる。

その一方で、文献よりデイがあると考えられ、その上で座敷とは異なる接客空間をもつ建築類型として、たとえば庄園の政所や畳を敷かない接客室をもつ建築群があることも明らかになった。そこで、前者の例として葛川明王院の政所、後者の例として吉水神社の書院を調査し、それらが中世の領主住宅のデイの特色を色濃く残す接客空間であることを、絵画史料や文献史料、指図資料との照合から推測するに至った。明王院政所と吉水神社書院は、ともに和室（畳敷きの座敷）ではなく、本来は板敷であったデイの形状を良く残す遺構である。

町家については、まず近世初期の形状を非常に良く残すと考えられる巖島神社門前町の最古級の町家2棟（飯田家作業所・田中家）の放射性炭素分析を行った。

飯田家作業所の場合、本研究費で柱1本、梁2本の分析を行い、引きつづいて結果の重要性から、国立歴史民俗博物館の基盤研究費により柱3本、梁1本の追加分析が行われた。次頁に、データの一部を掲載する。

田中家の場合、本研究費で梁3本の分析を行った。

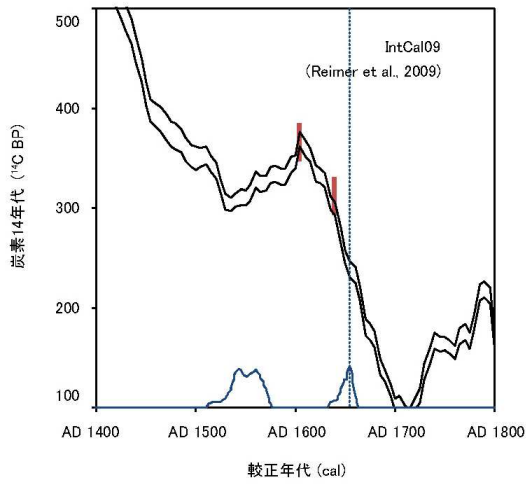


図1 飯田家作業所 棟通り東妻柱

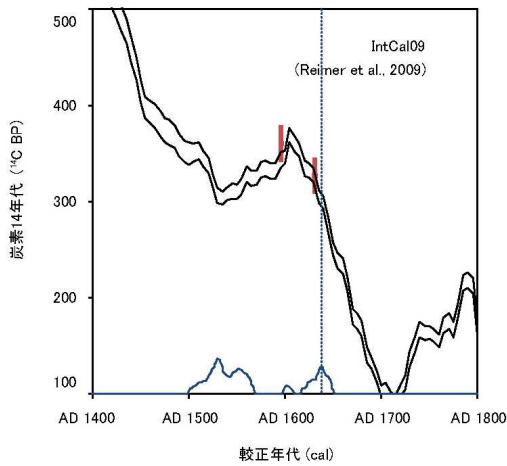


図2 飯田家作業所 棟通り西妻柱

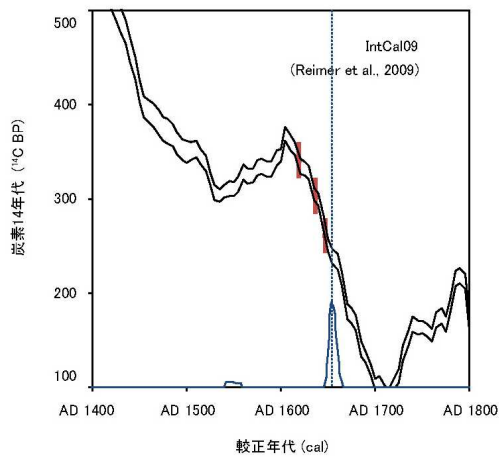


図3 飯田家作業所 表軒桁

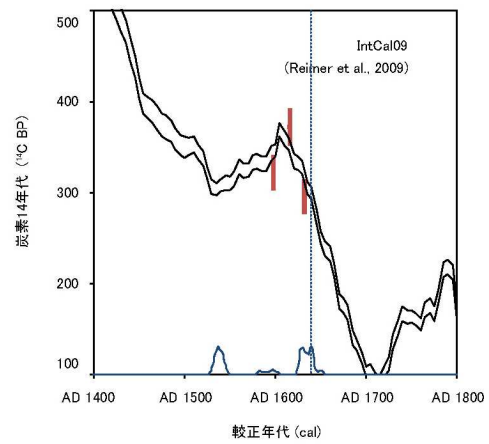


図4 飯田家作業所 棟通り桁行梁

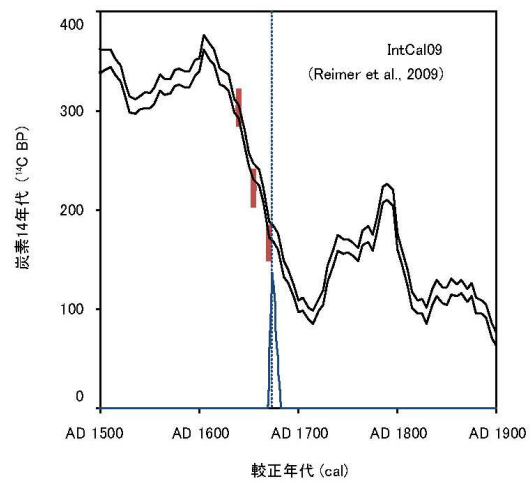


図5 田中家 小屋梁 (切断面)

以上の分析の結果、2棟とも17世紀中期前後に伐採された木材で建てられており、建造年代は17世紀後期を降らないことが示された。技法や、絵図史料等からも、このことが裏づけられるので、これで江戸時代初期の宮島の町家の形式や技法が明らかになった。

巖島神社門前町には、これらよりも古い若狭家住宅もあり、共通して上部が吹き抜けになったオウエという部屋を中央にもつ特徴があるが、このオウエと呼ばれる部屋は、16世紀の京都で、ミセとならぶ町家の中心的部屋であったことが知られている。

したがって巖島神社門前町の17世紀に遡る各種の町家の形式は、そうした中世末期のオウエという居住空間の形式を残し、門前町全体で20数棟残る町家遺構は、その後の発展過程を示すものであることが推測されるに至った。

つぎに、そうした中世の町家が成立した中

世都市の研究を行い、中世都市の街区規模とそうした町家の規模に関係性があることを推測するに至った。

この分析は、中世からの港湾都市である福山市鞆の浦地区で行い、街区を実測し、各街区の測地尺を分析し、「間」を単位とする測地尺が、中世には7尺から6尺へ短くなるという文献史料の示す傾向と照合して、各街区が造成された時期を推定した。

下記に、街区の実測値を6尺から7尺の1寸ごとの値で割り、計画地と考えられるものの適合率の高さから、その街区の測地尺を推定した作業の一部と、各街区の測地尺の推定結果と、標高や発掘調査の結果を照合して、各時期の海岸線を示した図を掲載する。

表1 鞆の浦 原町・村内地区の分析表

測地尺	6尺	6尺1寸	6尺2寸	6尺3寸	6尺4寸	6尺5寸	6尺6寸	6尺7寸	6尺8寸	6尺9寸	7尺	備考	
村内	65.13	55.83	55.24	54.93	54.12	53.12	52.12	51.62	50.62	49.62	48.62	47.62	町内デブロッタ
19.89	30.19	29.69	29.22	28.75	28.00	27.00	26.00	25.00	24.00	23.00	22.00	19.12	同上
55.86	38.73	38.22	37.72	36.82	35.82	34.82	33.82	32.82	31.82	30.82	29.82	28.82	同中門前
47.90	26.24	25.81	25.36	24.90	24.00	23.00	22.00	21.00	20.00	19.00	18.00	17.00	同上
22.26	12.30	12.10	11.92	11.71	11.42	11.20	11.00	10.80	10.60	10.40	10.20	10.00	同上
22.26	12.26	12.10	11.92	11.71	11.42	11.20	11.00	10.80	10.60	10.40	10.20	10.00	同上
31.20	20.20	20.20	20.20	20.20	20.20	20.20	20.20	20.20	20.20	20.20	20.20	20.20	同上
27.04	14.67	14.63	14.59	14.17	13.54	12.75	12.00	11.25	10.50	9.75	9.00	8.25	同上
15.68	13.00	12.91	12.82	12.73	12.64	12.55	12.46	12.37	12.28	12.19	12.10	12.01	同上
6.25	3.70	3.65	3.53	3.27	3.02	2.77	2.52	2.27	2.02	1.77	1.52	1.27	同上
11.97	11.20	11.10	11.00	10.90	10.80	10.70	10.60	10.50	10.40	10.30	10.20	10.10	同上
39.86	14.50	14.20	13.90	13.60	13.30	13.00	12.70	12.40	12.10	11.80	11.50	11.20	同上
40.66	22.25	22.10	21.94	21.78	21.62	21.46	21.30	21.14	20.98	20.82	20.66	20.50	同上
41.26	32.85	32.70	32.54	32.38	32.22	32.06	31.90	31.74	31.58	31.42	31.26	31.10	同上
16.90	42.30	41.91	41.52	41.13	40.74	40.35	39.96	39.57	39.18	38.79	38.40	38.01	同上
27.21	15.11	14.95	14.80	14.64	14.48	14.32	14.16	14.00	13.84	13.68	13.52	13.36	同上
33.11	17.00	16.84	16.68	16.52	16.36	16.20	16.04	15.88	15.72	15.56	15.40	15.24	同上
33.61	30.75	30.59	30.43	30.27	30.11	29.95	29.79	29.63	29.47	29.31	29.15	28.99	同上
14.18	7.79	7.63	7.47	7.31	7.15	6.99	6.83	6.67	6.51	6.35	6.19	6.03	同上
28.02	19.02	18.86	18.70	18.54	18.38	18.22	18.06	17.90	17.74	17.58	17.42	17.26	同上
標高調査	0.00	0.00	0.20	0.40	0.60	0.80	1.00	1.20	1.40	1.60	1.80	2.00	同上

注) この表から、海岸に近い原町は1間が6尺7寸と推定される村内地区より遅れて、6尺6寸で造成されたこと、いずれも応仁の乱後といわれる6尺5寸より長いことから、室町時代前半に形成されたことが推定できる。

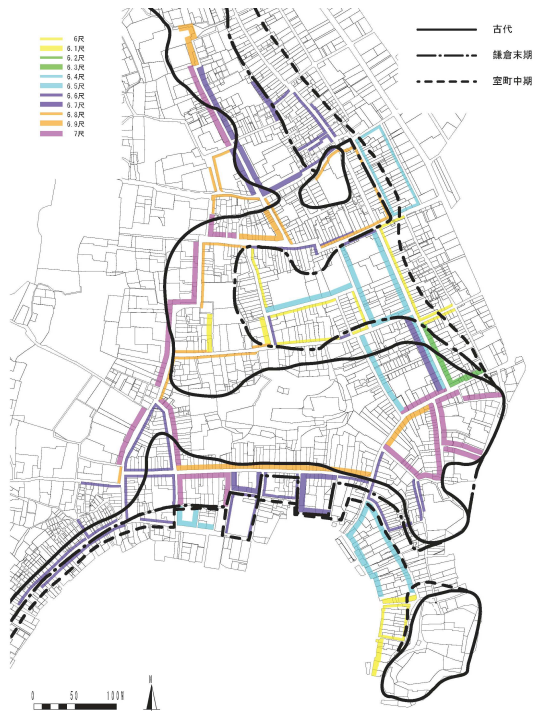


図6 鞆の浦の測地尺・海岸線推定図

以上の成果から、古い街区形状を残す都市では、現状の街区幅の実測から、その形成時期を推定できる可能性があることが判明した。

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

- [雑誌論文] (計2件)
 - ① 藤田盟児、厳島の町家建築の年代測定結果、広島県文化財ニュース、査読無、2011、pp6-13。
 - ② 藤田盟児、鎌倉前半期における上層武家住宅の実態と変遷過程、建築史学、査読有、2009.9. pp2-40

[学会発表] (計0件)

[図書] (計1件)
藤田盟児、他、福山市教育委員会、福山市鞆町伝統的建造物群保存対策調査、2012、450

[産業財産権]
○出願状況 (計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況 (計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]
ホームページ等

6. 研究組織
(1) 研究代表者
藤田 盟児 (FUJITA MEIJI)
広島国際大学・工学部・教授
研究者番号：20249973

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：